

百家ノ廿

年々登山のついでありて谷々のとせ

輯者曰く不二同行といへる者ありて何うえあはぬ唱言を

とて聞ふともありて片腹のつれものなり渠們は

富士來迎三尊の支と辨べ小生嚮の年富士へ登山

は目目の室よりして宿すに初更さだにも思は

力不二登山とて麓より着てふあひが云やう當下御來迎あり

拜めんと云ふとて室の裡より立ち出て巖角に跪下て居

るふ忽ち暗々たる地下より其廻り二間四方も有つらん

思ふ月輪の現も昇ると看ゆ三尊の容りやと眼と

めく是と看ふ月の當ふ些く見ゆらんといはる時何あり

あつらん黒きさめの三回やど立双びく見ゆるあり是れ
彼人々が三尊如来といふ云々めと看々立地空間への
夏より〜早〜空中ふり〜りても坡下みて看よりら
月の影大きく見え空も常より近く見え月の廻り五
色も看え晴天蒼々〜として風冷やうふ雞犬声あく水音
あく眼も遮る者として八月と星と巖角の〜此時六根清浄
あ〜して色欲の心と離れと實ふ天上も生〜る若く覺ゆる
あり然む凡俗の心あ〜へ這處〜も富士の極樂と
思ゆり〜と些の思ひ中〜あり亦天曉ふありて日輪の昇る
と拜は是れ亦り〜大きく見え唯紅と以てりら〜り

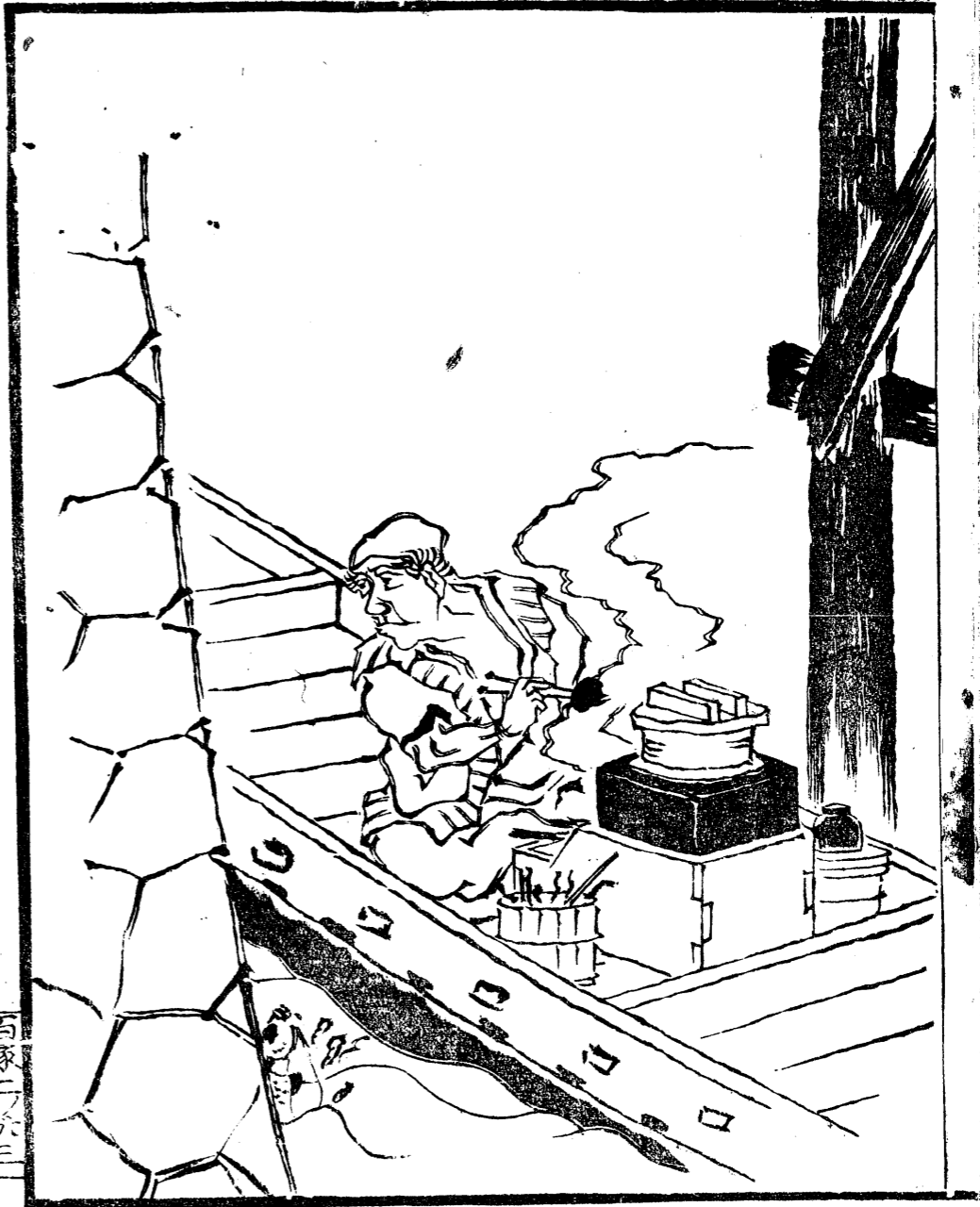
〜如く美〜と怕明〜り〜其れ〜り五色も看〜何と
あ〜尊〜思〜り〜然〜も三尊の事〜論〜るふ是れ
佛の容も有〜らば秋芥子の〜る人の影の〜るも
〜り〜桂氏の著る書の中も富士山への〜り〜て日の出と拜
〜る小日の中も三尊の如きりの看〜るあ〜人々有難や尊
やと伏〜む一人立て點頭を三尊も〜るあ〜手〜を挙て
招けが三尊も〜る〜是れ我影の映るありと記せり是れ
大いあり証言あり小生手と挙て招き〜る〜も三尊
〜る〜點頭〜も三尊〜あ〜つ〜る〜何〜る〜秋芥
翁斯る文と記つ〜る〜思ふ〜理字類編〜り〜人岬眉

山やまに到いたる五更ごせいの初はつに看みる白氣しやくきと布ぬい既すでありて圓光えんかうあり鏡かがみ
 の如ごとく其中そのうちに佛ぶつあり然しかも其人そのひと手てと以もつて頭巾づかんと裏うらと
 光ひかり中なかの佛ぶつもすゝ頭巾づかんとつむ是これを以もつて人の影かげの映うつる
 と知しるとその故事ごうしと讀よんで富士ふじ三尊さんそんも同どうじ物ものありんと思おもひ
 記ししもの覺かくめ人の影かげの映うつるあゝ何なにぞ三尊さんそんに限かぎんや
 十人じゅうにん拜まがせば十尊じゅうそん現まれ五人ごにん拜まがせば五尊ごそんの仏ぶつと看みべは理りあり
 是これは人の影かげはうつるふあゝ月つきの當あたり地下ちかと離はなれんとす時とき
 地球ちきうの影かげ乃すなはち映うつるあゝ月つきの餘光よこひかりと受うて明あくす故ゆゑに
 地影ちかげうつる夏なつあゝべー地球ちきうも圓まるありといふは平圓へいえんの
 あゝ凸凹とつあふも圓まるありや知しべー然しかして日ひも三尊さんそん

看みる

○行人ぎやうにん七兵衛しちべゑ

延寶えんぽうの頃ころ江戸えど日本橋にっぽんばし四日市よっぴちに七兵衛しちべゑといふ老翁らうおうありたり爰こゝ
 へ一ひとの船舎ふねやに雇やはれ雑舟ざつしゅうの夏なつと業わざとすゝたり這者こゝろ一個
 の異物いぶつあり其躬そのみ家いへあゝつ終はつふ舟ふねの裡うちに住すまひ朝夕あさゆふの食事あじふ
 大おほくも諸方しよほうの舟舎ふねやあゝり或あるは船中ふねなかあゝ飯いひ
 らくもる夏なつも有あり出羽でやの國湯殿山くにゆどのやま羽黒山はぐろやまと信しんじて毎年まいねん
 三度さんどづ参詣さんぎすもつとも利き足ありて往來りやうらいもつろ十日じゅうにちも過すまひ
 常とこに垢汚かうつる衣服いふくとすゝし美食びあじと好このむ舟ふねとのりて錢ぜにと得え
 び人の家いへに預あづかりぬ満みて餘分よぶんとあるといふに忽たちちやうと羽黒山はぐろやまへ



参詣は七兵衛常病ある人と看とれは是も祈禱とせしむ
 くらが忽ち平愈ゆくと小兒の五疳驚風あはれの咒く其効驗
 きびく有て遠近の人をかの船のちちへ尋ね來て七兵衛
 祈禱と史と神符おど貫ひぬる人おわし然む行人七兵衛と
 異名しりり這老爺つひふ人ふ語らるら湯殿山へさび参詣
 くる者ハ鎗一条の主ふ生るといひ傳へくる賤老湯の山羽黒山
 へ参詣せし事壯年より今年まで九十度ふせびぬ極て未
 せと一國の城主も生るべく思ありと云るふぞ是を聞人々
 大いふ笑ひくるとあり八十二歳く終ふ船中ふ歎す近辺及び
 同業の人々集り是と語りぬり他が菩提處浅草寺町金

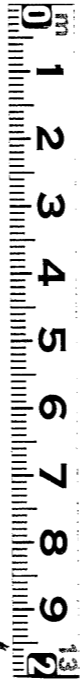
藏院といふふ葬りたる然して後三十日許ありて那里より
 三四人の侍來り這やうり行人七兵衛といふ者ありやと
 尋らう舟舎のいひ答て夫ら此ところへ住る者にて
 候へども響つて終去さうと云くも然むとて寺
 といつてぞ問もるるを淺草金藏院と教る侍も
 大の喜びひらき淺草へ趣きたり當時舟舎のあり
 かの侍は何幹しうかかろむが給ふと問に侍衆答
 てしむしが御主人此とび御男子出生はしりたるが若殿
 の御手のいらに行人七兵衛と青痕のいりの文字あり是
 とゆらひふら其のの墓所の土をり洗ふとれら立地ふ

消すやまゝ這故ふそのふり八方ふ配手して找尋し
 倅候ふの實惠と聞ぬらうらび這上ふ有べうらびとて御館
 せうらうらび候しとて這ののぐり最心得る見言あれ
 とも或やん事あり御方の秘藏の書中うら見ゆらびとて終
 是ふあらん

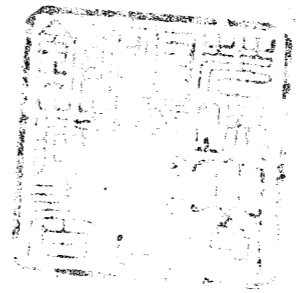
百家奇評傳

三

281
3

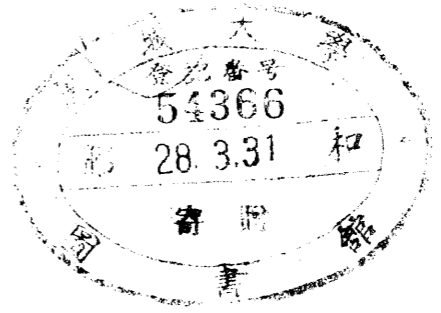


奉久



百家琦行傳三之卷目錄

- 義 齋 明 神
- 見 返 上 醫 者
- 滝 夢 輔
- 髭 の 亦 四 亭
- 郷 谷 老 夫 婦
- 栗 山 覺 左 衛 門
- 狸 の ト 者



○ 蛇へび 隱ひそ 居ま
 ○ 蛇へび 喰く 八兵衛

百家琦行傳三之卷

八島五岳輯

○ 義ぎ 齋さい 明めい 神しん

明和安永の頃攝津の國豊島郡麻田といふ處今氏と云ふ義齋
 とりて老醫ありたり元加賀の國の産なりて久々京師
 小在て醫術と學び一處不住なりてひひ々々遍歴あり
 しが竟ふ老年ふぬむびと何か候より俸禄と給と麻
 田ふりし住しり義齋もつと仁心ふりて遠く
 あく近れとあり貧困乃者の家ふ病人あり忽ち行て動
 静とらむ良薬とやとて是と救ひ給ふと云ふ

に取謝イモツとらけは病後極貧乃のよに我家より米薪あや
らうして是と助く病て家産とらうあふ者よの本錢と與
活業とあさしむ麻田辺郷二三里が間の貧者の義斎が恩
と蒙らざるを希ありと一日領主の一日風氣よおと
ほして義斎と宜多ひたるが義斎が衣服の餘よ土垢着
るると看多ひ渠ふ衣服ととせよと曰ひたりと近送の
侍やが御府衣ひととひりて出て義斎ふ着せり義
斎懼びて退れたるが家ふかへる路のあつりよ一人の老を児
病ふらうとて叫居て義斎とれと看て哀よおひ懐
裡より薬ととり出しと児ふあへり今日寒氣とふり強

衣が破衣よて堪とてかへし是と着よとて上よ着とりし
衣服ひと人脱とて児ふ着せ望よと見よとべし大事
うけよと云とて家ふかへりぬ次の朝己のとたてりよ義
斎御殿と候視んとて這とらと通りとらよ二三人の下
らぬを児ととて太く打擲し居りつある説とて問ふ
下侍とて這と見御府衣とぬきと着とつらぬを打殺
棄るありと喚とら義斎やとらき是とらきのよ我與とら
の御府衣ありきのよ寒と餘と強と下衣とぬが頼と思
上衣とあへり十分愚老があやまらあり管は他が偷
らあへり且とら我衣と交易とて義斎路上よてあ

ふあり我衣服とぬぎて之見ふ着せ今まで之見が着てあり御
府衣ととの終我躬ふやうい帯むさび羽織とらう着其ゆ
正殿へ出ふたり下侍ども是と看て唯忙然とて居る
とと元来義齊の行状の老人あまふ上仕ふる事を頼
ゆのひ時ふらしてゆはん辞去と願ひるも領主
て免しあらば義齊を何とて這處とのが去べと思ひ
一時病氣と披露し出仕せば四五日と経て病疾のよう下儘
て申達しとせやくも頓て看住の典史はあまの夏あり
義齊おどろき大い困る急ふひこの棺とて其裡
へて跪路とらう程あく看住の典史来りたるも最早

棺ふ収て正におなうらなを深くも查勘はかりたる斯て
葬式とて行ても悪くも俄に墓所へ人ともせて形
許葬禮とあまんとはるふ回耐送とて人多く来りて混
雜とて斯て棺と茶毘舎ふらして蓋とひくはるる裡
より義齊這いぞ我の命數つれず焔王のゆりて受て
當下よりかへるる云て人々と突のけ火房を出て其
去方と知れ其後麻田より二三里許ある岡といへる處に義
齊と帰依の者ありて亦爰ふ家と造りて住はせたる前の主君
是と知るへども御咎めもた
岡の町のうち新免領とて爰に住
他領の地ふ家とつりて住
事とて多年あり貧人の病と治し米薪とあらうて困窮の人